

2019年度  
入学試験問題 (1期)

国 語

2019年1月31日 (木)

解答を始める前に次の注意事項を十分に読みなさい。

受験上の注意事項

1. 受験票と筆記用具以外は机の上に置いてはいけません。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
3. 不正行為と認められた場合には退席を命じることがあります。
4. 「開始」の合図で、問題用紙・解答用紙を点検し、解答用紙の受験番号・氏名欄に受験番号・氏名をはっきり書いてください。
5. 問題に関する質問は不明瞭な文字等の確認以外は応じません。
6. 問題冊子の余白部分や白紙のページは、自由に使用してかまいません。
7. 試験終了時まで退席することはできません。試験終了の合図と同時に、監督者の指示にしたがって解答用紙を通路側に置いてください。
8. 身体の具合が悪くなったときは、手を挙げて監督者に申し出てください。
9. 携帯電話を持っている人は電源を切ってください。これを時計として使用することはできません。
10. 問題冊子は持ち帰ってかまいません。

## 〔 I 〕

次の**文章A**は言語学者の著した『はじめての言語学』の一部を引用したものであり、**文章B**は辞典編纂者の著した『三省堂国語辞典のひみつ』の一部を引用したものである。それぞれの文章に関する設問に答えたのち、**文章A**と**文章B**を関連づけて考察する設問に答えなさい。

**文章A**

## ストレスが溜まる四つの原因

わたしの言語学の授業では、授業の始めに書いてもらおう短いプレテストのほかに、授業後に書く小論文がある。その日の授業の内容を踏まえて、いろいろな言語現象についての意見を書いてもらおうのである。なるべく自由に書けるようにと大きなテーマを与え、それぞれが自分の体験などをもとにして話を展開してもらいたいと考えている。

その小論文を毎回読んでいるうちに、ある傾向に気がついた。学生によっては新しい知識、コンセプトをもとに今まで経験したことを再検証しようとする。これは授業が効果的であったことを示す。だが全員がそうとは限らない。逆に、いままで持っていたイメージが否定されることに非常な不快感、抵抗感を示し、言語学の考え方に敢えて挑戦しようとするのである。それが納得のいくものだったら素晴らしいのだが、多くは感情論であり、悔しさをぶつけているのにすぎない。うーむ。

言語学の教師がしたり顔であれも違うこれも違うと、世の中に流布する言語観を否定する。話している本人はいい気分かもしれない。しかし、聴いているほうは、初めのうちこそ、なるほど、そうなのかと感心していても、そのうちに何やら嫌な気持ちになつて、イライラしてくるのではないか？

別に毎回の授業を正しく理解し、その都度考えを改めてもらいたいとは思っていない。ただ、なにやらモヤモヤした気持ちがおさえ切れなくなつて、新しい考え方を受け入れられなくなつていたりしたら、これは困ったことだと気がついた。なにも授業を通して学生をいじめて楽しもうというのではないのである。

そこで言語学を学ぶとどうもストレスが溜まるのではないかという勝手な仮説を立て、それはどのような原因にもとづくものであるかということ、心理学者でもないくせに、敢えて取り上げてみようと思つたのである。

言語学に対するストレスの原因として、次の四つを考えてみたい。

(1) イメージを否定されるストレス

(2) 用語の厳密さに対するストレス

(3) 枠にはめられるストレス

(4) 日常のことは遣いに対して指摘されるストレス

### イメージを否定されるストレス

言語について何も知らない人はいない。たしかに言語学についての知識はないかもしれない。しかしことばについてはいろいろと考えたり、本を読んだりしている場合が多い。自分なりの哲学もある。なんといつても、ことばに興味があるから言語学を覗いてみようと思ったのだ。それなのにあれも違う、これも違うといわれては、どうしていいのかわからなくなってしま  
うではないか。

どうも人間は保守的な動物のようだ。自分の信じてきたもの、長年親しんできたものが否定されるのはかなり辛い。ことば  
だったら、十代から二十代に身につけたものが古いといわれてバカにされたり、自分では受け入れがたいものが最近の標準に  
なりつつある現状を見たりすると、どうにも我慢ならない気分になる。

たとえ正しい知識にもとづいて学者が説明したとしても、自分の意見を否定されることが愉快なはずはない。

(中略)

### 日常のことは遣いに対して指摘されるストレス

これは言語学の考え方から生じるストレスではないが、多くの人がフラストレーションを感じる最大のものである。すなわ  
ち、自分ではふだん何気なく使っていることばに対して、トヤカクいわれるのはみんないやなのだ。

たとえば「花に水をあげる」という表現を最近聞くが、これは「花に水をやる」でいいのではないか? 「おっしゃる」はよ  
いけれど、「申される」とはいったい何なのか? あるいはいわゆる「ら抜きことば」。可能形の「ら」を落として発音する  
い方で、「食べられる」が「食べれる」などとなる。これは正しいのか?

最後の「これは正しいのか?」というのがポイントである。すなわち、このようなことば遣いを検証するときには、必ず価  
値観が伴う。正しいのか正しくないのか、または美しいのか美しくないのか? 自分の使っていることばが正しくない、美し  
くないとなれば、当然、愉快ではない。

さる公的機関の世論調査によれば、ふだんの生活の中で自分自身の日本語のことば遣いが乱れていると感じることがあるか  
と調査したところ、「よくある」「ときどきある」「たまにある」で八割に達したそうだ。多くの人が自分のことば遣いをダメだ

と思つているのである。

なんと自虐的<sup>⑧</sup>なのだろう！ これはケンキヨ<sup>①</sup>さを超えていると思う。日常使つてゐることばにこれほど多くの人が自信が持てないとは、驚きである。

なぜか？ それは常にダメだダメだといわれているからである。ことばについての話が好きなのはいいのだが、マスコミなどの報道では「最近のことばの乱れ」というのにシヨウテン<sup>⑨</sup>の当たつてゐることがとても多い。この「乱れ」という観点からしてすでに評価が含まれてゐる。常日頃<sup>⑤</sup>からそういうものを目にしていけば、自分のことば遣いに自信が持てなくなるのも当然である。彼らを言語自虐論者と呼ぼう。

またこの反対の立場を取る者も現れる。つまり、ことば遣いが少々違つたつて、それがどうした、ことばなんて通じればいいじゃないか、どうせ道具なんだから、といった開き直りである。いくら乱れてゐるといわれようが、ふだんは何の問題もなく話してゐるんだ。そんな細かいことを気にするのは、一部の意地悪な言語学者ぐらいだ。学者が偉そうになんかいったところで気にするもんか。こういうグループを言語道具論者<sup>⑥</sup>としよう。

この自虐論者と道具論者は、真つ向から対立するものではない。自虐論者があるときキレて、ついに道具論者になるというパターンもある。過激な人も多い。かくして、言語学者に対する敵は増えるばかりで、月のない夜は外を歩けない。

しかし、ここで弁解しておく。この点に関して、言語学は無関係である。

そもそも、「ことばの乱れ」という発想が言語学にはない。あるのは変化だけである。ことばはいつの時代でも変わつていく。それを現象として注目はするが、正しいとか正しくないとか評価して、人を啓蒙<sup>⑦</sup>したり、批判したりすることは考えていない。心情的に新しい語や表現を嫌う言語学者もいるだろうが、立場としては中立でなければならぬ。

正しいか正しくないかなんて、どんな基準をもとに決めたらいいのかわからない。「イメージを否定されるストレス」でも述べたように、多くの人が自分の長年親しんできたものを基準にしようとする。これは身勝手というものだ。ましてや美しさなんて、人それぞれではないか？ 個人的な価値観を押し付けてもらつては困る。

新聞の投書欄なんかで、「嘆かわしい最近の日本語」などという見出しを目にすると、わたしはヤレヤレ<sup>④</sup>と思う。いままで感心する意見は一つとしてなかった。これからもないだろう。そういう個人的な意見をどうして声高にウツタ<sup>⑩</sup>えたがるのか不思議である。

さらに、民間の研究所が主催してゐる日本語力の検定試験も、まったく興味がない。いや、正しく答えられるかといわれた

ら、たぶんできないだろう。でも気にしない。そういう正誤判断は言語学にとって意味がないのである。

ただ、ここで一つだけ反論しておきたい意見がある。それは言語道具論だ。

言語は道具ではありません。似ていないことが多すぎる。まず簡単には手に入らない。金を積んでもダメである。でも、いちど手に入ると失うことはあまりない。その使い方はずっと多様だ。そして目には見えない。いまいちはずきりしないけれど、でも間違いない存在していて、それ自身が研究対象になるのだ。だから言語学があるのである。

(黒田龍之助『はじめての言語学』より)

問1 傍線部①「ある傾向」に当てはまるものをすべて選んで記号で答えなさい。

ア 学生の大半が新しい知識をもとに今まで経験したことを再検証しようとする。

イ いままで持っていたイメージが否定されることに非常な不快感、抵抗感を示す。

ウ 初めのうちは感心していても、そのうちに嫌な気持ちになって、イライラしてくる。

エ モヤモヤした気持ちがおさえ切れなくなって、新しい考え方を受け入れられなくなる。

オ 言語学を学ぶことはストレスになるから、もう学びたくないと言う。

問2 傍線部②「したり顔」とはどのような顔か、最も当てはまるものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 苦々しく思っている顔。

イ 感情が読み取れない顔。

ウ 知ったかぶりをしている顔。

エ 威厳を感じさせる顔。

オ 得意になっている顔。

問3 波線部③④の漢字の読み仮名をひらがなで書きなさい。

③ 流布

④ 自虐的

⑤ 常日頃

問4 波線部①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ケンキョ      ② ショウテン      ③ ウツタエ

問5 傍線部④「トヤカク」の具体例として挙げられているものを読み取り、そのうちの一つを選んで、適宜要約しつつ二十字以上三十字以内で記しなさい（括弧や句読点などの記号も一字に数える）。

問6 傍線部⑤「ヤレヤレ」という語で表現される感情とはどのようなものか、最も当てはまるものを一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 深く感動している。  
イ ほっとしている。  
ウ 応援している。  
エ あきれている。  
オ 活力を失っている。

文章B

「全然支配される」は全然OK

ことばの「濡れ衣ぬれぎぬ」と言えば、「全然」についての話を避けて通るわけにはいきません。

「あいつが全然悪い」のような使い方を聞くと、一般に、意見は2つに分かれます。

ひとつは、「『全然』の下は否定形で結ぶべきだ。それが伝統的な使い方だ。『全然悪い』は否定形でないから誤用だ」というもの。

もうひとつは、「たしかに、昔は『全然』の下は否定形だったかもしれない。でも、ことばは変わる。そろそろ『全然悪い』のような言い方を認めてもいいのではないか」。

この両者の間で「ことばの乱れ論争」が起こることがしばしばでした。

ところが、日本語研究の進展によって、「『全然』の下は否定形で結ぶのが伝統的」というのは、都市伝説（根拠のない噂話うわさ）

であることが、ほぼ定説になっています。「全然」(否定形)は、伝統的どころか、特に戦後に一般化した用法と考えられます。「ことばの乱れ論争」のそもそもの前提が崩れたわけです。

これは、大学の日本語学概論などでもよく取り上げられる話題です。学生は、たとえば夏目漱石「坊っちゃん」(1906年)の次のような文章を示されます。

一 体生徒が全然悪<sup>わ</sup>いんです。どうしても詫<sup>あや</sup>まらせなくつちあ、癖になります。退校さしても構ひません。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……

(『漱石全集 第二卷』岩波書店 317ページ)

はつきりと(全然悪<sup>わ</sup>い)と書いてあります。これは「完全に悪い」の意味です。「全然」が広まったのは明治以降のことですが、最初から、否定形で結ぶ言い方もあれば、肯定形で結ぶ言い方もありました。

もうひとつ有名な作品から引くと、芥川龍之介「羅生門」(1915年)にもこの言い方が出てきます。

これ「黙<sup>もく</sup>つて両手を震<sup>ふる</sup>わせている老婆の様子」を見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云<sup>い</sup>ふ事を意識した。

(『筑<sup>ちく</sup>摩現代文学大系24』筑摩書房 8ページ)

(全然……支配されてゐる)とあります。これも「完全に支配されている」という意味です。「羅生門」は多くの高校の教科書に載っており、この言い方が戦前からあった事実は誰もが目にしているはずですが、それでも、「全然」の下は否定形が正しい」という説が長く受け入れられていたのですから、私たちの思い込みがいかに強固なものが分かります。

その後、「AよりBのほうが全然(断然)大きい」という用法や、「大丈夫でしょうか?」と聞かれて「全然大丈夫です」と答える用法(心配や問題を否定する)が広まりました。『三<sup>さん</sup>国』(引用者注、『三省堂国語辞典』の略)第7版では、これらを次のようにまとめました。

ぜんぜん「全然」(副)①「下に打ち消しや「ちがう・別だ」などのことばが続いて」すこしも。まるで。「何があったかー知らない・あいつはーだめだ」②完全に。すつかり。「ー言いがかりというものだ・鼻がーつまっちゃってるね」▽(①の用法だけが本来とされることが多いが、戦前から、①②の用法がともに使われた。戦後、①が特に広まった)③「話」ほかとくらべて、断然。「いつもの授業とちがつてー楽しかった」④「話」心配する必要がない、問題がない、ということであらわす。「『この服、変じゃないかな』「ううん、ーかわいいよ」・「行ってもいいですか?」「ー来てください」」

②の後に注をつけて、本書で今述べたような「全然」の歴史を説明しました。さらに、その後の口語的な用法として③④を記しました。

④の最後には「全然来てください」という新しい言い方まで紹介しました。これも「全然」の意味変遷の歴史の一部として見てください。

(飯間浩明『三省堂国語辞典のひみつ 辞書を編む現場から』より)

問7 傍線部㊦「濡れ衣」を用いた例文を完成させるため、次の枠囲みの文章の括弧内に当てはまる表現を書きなさい。

兄はテーブルの上にあつた唐揚げを一つつまむと自分の部屋へと引き上げた。その直後に母が振り返り、  
「まあ、つまみ食いなんかして!」と、なぜか僕が怒られてしまった。兄は僕に濡れ衣を( )のだ。

問8 傍線部㊦「注をつけて」の「注」に相当する部分を読み取り、最初と最後をそれぞれ三文字ずつ書き抜きなさい(ただし、括弧などの記号は除く)。



問9 以下のそれぞれについて、本文の内容（筆者の考え、または、その根拠として示された資料）と「一致するものには○、一致しないものには×を、それぞれ解答欄に書きなさい。

ア 「あいつが全然悪い」のような使い方は、「全然」の下を否定形で結んでおらず誤用だ。

イ 「あいつが全然悪い」のような使い方は、昔は誤用とされたが、今は認めてもいい。

ウ 「全然」の下は否定形で結ぶのが伝統的である、とする考え方自体が根拠のないものだ。

エ 夏目漱石も芥川龍之介も、「全然」の下を肯定形で結ぶ文章を書いている。

オ 「いつもの授業とちがって全然楽しかった」のような使い方は、主に話し言葉で使われる用法である。

問10 以下のそれぞれについて、文章Aと文章Bを対比させた結果を適切に説明していると思われるものには○、そうでないものには×を、それぞれ解答欄に書きなさい。

ア 文章Aも文章Bも、ことばの専門家の立場から、「ことばの乱れ」を問題視している。

イ 文章Aも文章Bも、「ことばの乱れ」を問題視する世間一般の考え方に言及している。

ウ 文章Aも文章Bも、ことばは時代と共に変化するもの、という前提を共有している。

エ 文章Aは、ことばの正誤判断は言語学の関心事ではないとし、文章Bは、ことばの正誤判断の前提が崩れる場合もあることを、具体例を通じて示している。

オ 文章Aも文章Bも、ことばの専門家の立場から、一般の人々の誤解を解こうとしている。

〔II〕

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

パン屋が鍵の預かり所

星野博美

6月半ば、14年ぶりにベルリンへ行つた。

以前このコーナーで触れたが、ベルリンの壁が崩壊した翌月に知り合つたマルティナという友達がいる。彼女は当時から付き合っていた恋人と結婚し、ベルリンのクロイツベルクで暮らしている。

出発が数日後に迫つた時、彼女からメールがあつた。ベルリンの気温がついに30度を超え、もう耐えられないので、夫婦二人で田舎の別荘に行く。不在の間、ベルリンの家を自由に使ってほしい。そして頃合いを見計らつて、別荘にもぜひ来てほしい、と。

それは願つてもない申し出だつたが、鍵の受け渡しはどうすればいいのだろうか？

「よつき、近所のパン屋に預けておいたから。行けばきつとわかるはず。何か問題があつたら電話して！」

えーと……近所のパン屋？

それで大丈夫なのだろうかと訝しく思つたが、それがベルリン流の近所付き合いなのだろう。不思議な気分のまま、出発を迎えた。

当日。ベルリンは、確かに「④」を絶するほど暑かつた。街から脱出したくなる気持ちはよくわかる。彼女に教えられた住所をスマホの地図アプリに入力して、荷物を引きずりながらパン屋を探した。

それは有機栽培のパンとオーリーブオイルを売る店だつた。パンを売るだけでなぜこれほど空間が必要なかと羨ましくなるほど、広い店内。店員さんに、かくかく「⑤」、鍵の顛末を説明したところ、すぐに事情を察し、大きな机の引き出しを開けてくれた。

「お、どれかしらっ？」

驚いたことに、その引き出しには鍵という鍵で埋めつくされていた。ここに鍵を預けているのは、マルティナだけではないのか！ 近所じゅうの人の鍵がここにある、という具合なのだ。

「ベルリンは、誰もが〔 ⑥ 〕過ぎて、人が冷たい」

かつてマルティナがそう語ってくれたことがある。保守的なドイツの田舎だけでなく、世界中から、自由とクリエイティブな生き方を求める人が集まるこの街。旅行者として滞在するなら、この上もなく刺激的な街だが、30年暮らす彼女の言葉は偽りのない本音なのだろう。

この山<sup>⑦</sup>となった鍵を、どう解釈すればよいのか悩んだ。毎日パンを買う店で、確固たる近所付き合いが成立している、とも見える。一方では、鍵を預けられるような関係性の隣人がいないため、誰もがパン屋に集中する、とも映る。いずれにしても、私の見知った日常とは異なる人間関係が、この街にはあるようだった。

「あ、これです。封筒に私の名前が書いてある」

懐かしい、マルティナの筆跡だ。涙ぐんだ。これまで垣間見たことのない、彼女の日常に触れられた気がした。早く彼女に会いたい。これほど、この街を愛おしいと思ったことはなかった。

(平成三十年七月三十一日 読売新聞より)

問1 傍線部①「もう」と同じ用法のものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 彼女はもう来るでしょう。

イ もうちよつと右へ動かしてください。

ウ その事はもう忘れた。

エ もう一杯いただきます。

問2 傍線部②「それ」を具体的に十一字以内で書きなさい(句読点等含まず)。

問3 傍線部③「不思議な気分」の理由を述べている部分が、この文章の後半にある。それを三十二字で書き抜きなさい(句

読点も一字に数える)。

問4 「」に入る漢字二字の熟語を答えなさい。

問5 「」に入る言葉を平仮名四字で答えなさい。

問6 「⑥」に入る言葉として最も適当なものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 法治主義

イ 厭世主義

ウ 自然主義

エ 個人主義

問7 傍線部⑦「山」と同じ用法のものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 彼には借金の山が残った。

イ ジャガイモはひと山百五十円。

ウ どうやら山は越えたようだ。

エ 今回のテストは山が外れた。

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

## 人形

小林秀雄

或る時、大阪行の急行の食堂車で、遅い晩飯を食べていた。四人掛けのテーブルに、私は一人で坐っていたが、やがて、前の空席に、六十恰好の、上品な老人夫婦が腰をおろした。

細君の方は、小脇に何かを抱えてはいつて来て私の向いの席に着いたのだが、袖の蔭から現れたのは、横抱きにされた、おやと思う程大きな人形であった。人形は、背広を着、ネクタイをしめ、外套を羽織って、外套と同じ縞柄の鳥打帽子を被っていた。着附の方は未だ新しかったが、顔の方は、もうすっかり垢染みてテラテラしていた。眼元もどんよりと濁り、唇の色も褪せていた。何かの拍子に、人形は帽子を落とし、これも薄汚くなつた丸坊主を出した。

細君が目くばせすると、夫は、床から帽子を拾い上げ、私の目が会うと、ちよつと会釈して、車窓の釘に掛けたが、それは、子ども連れで失礼とでも言いたげなこなしであった。

「⑧」人形は息子に違いない。それも、人形の顔から判断すれば、よほど以前の事である。一人息子は戦争で死んだのであるか。夫は妻の乱心を鎮めるために、彼女に人形を当てがったが、以来、二度と正気には還らぬのを、こうして連れて歩いている。多分そんな事か、と私は想った。

夫は旅なれた様子で、ボーイに何かと注文していたが、今は、おだやかな顔でビールを飲んでゐる。妻は、はこばれたスープレを一匙すくっては、まず人形の口元に持つて行き、自分の口に入れる。それを繰返している。私は、手元に引寄せていたバタ皿から、バタを取つて、彼女のパン皿の上に載せた。彼女は息子にかまけていて、気が附かない。「これは恐縮」と夫が代りに礼を言った。

そこへ、大学生かと思われる娘さんが、私の隣に来て坐つた。表情や挙動から、若い女性の持つ鋭敏を、私は直ぐ感じたように思った。彼女は、ひと目で事を悟り、この不思議な会食に、素直に順応したようであった。私は、彼女が、私の心持まで見てしまったとさえ思った。これは、私には、彼女と同じ年頃の一人娘があるためであろうか。

細君の食事は、二人分であるから、遅々として進まない。やつとスープが終つたところである。もしかしたら、彼女は、

全く正気なのかも知れない。身についてしまった習慣的行為かも知れない。とすれば、これまでになるのには、周囲の浅はかな好奇心とずい分戦わねばならなかったろう。それほど彼女の悲しみ深いのか。

異様な会食は、極く当り前に、静かに、敢て言えば、和やかに終わったのだが、もし、誰かが、人形について余計な発言でもしたら、どうなったのであろうか。私はそんな事を思った。

※1 妻のこと。

※2 オーバーコートのこと。

※3 狩猟などに用いた帽子。ハンチング。

※4 第二次世界大戦のこと。この作品は一九六二年十月六日「朝日新聞」PR版に掲載された。

問1 「 ⑧ 」に入る文として最も適当なものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア もはや、明らかな事である。

イ 私は、訝しく思った。

ウ もはや、居た堪らない事態である。

エ 私は、食事を続けざるを得なかった。

問2 傍線部⑨「彼女は一目で事を悟り」とあるが、彼女が悟ったであろうことを八十字以内で書きなさい（括弧や句読点などの記号も一字に数える）。

問3 傍線部⑩「浅はかな好奇心」を具体的に五十字以内で書きなさい（括弧や句読点などの記号も一字に数える）。

[ I ] 問1 (5点) イ、ウ、エ (完全解答のみ正解) 問2 (5点) オ 問3 (各1点) (あ)るふ (い)じぎゃくてき (う)つねひごろ

問4 (各1点) (i)謙虚 (ii)焦点 (iii)訴え

問5 (9点) 「花に水をあげる」は「花に水をやる」でいいのではないか。(28字)  
「おっしゃる」は正しいが「申される」とはいったい何なのか。(29字)  
「食べられる」を「食べれる」と言うのは正しいのか。(25字)  
この3例のいずれかを取り上げて、文意が本文と一致していれば正解。20字以上30字以内の字数制限厳守。

問6 (5点) エ 問7 (5点) 着せた 問8 (5点) ①の用～まった (完全解答のみ正解。)

問9 (各1点) (ア)× (イ)× (ウ)○ (エ)○ (オ)○

問10 (各1点) (ア)× (イ)○ (ウ)○ (エ)○ (オ)○

[ II ] 問1 (3点) ①ウ 問2 (6点) ②パン屋に鍵を預けること

問3 (6点) ③私の見知った日常とは異なる人間関係が、この街にはあるようだった。

問4 (3点) ④想像 問5 (3点) ⑤しかじか 問6 (3点) ⑥エ 問7 (3点) ⑦ア

[ III ] 問1 (3点) ⑧ア

問2 (10点) ⑨老夫婦と「私」は他人で「私」は人形がどのようなものであるかを察していて、その人形はおそらく死んだ息子の代わりに、妻の心を落ち着かせるためであろうこと。

問3 (10点) ⑩人形やそれを抱く妻を好奇の目でじろじろ見たり、人形について無遠慮にあれこれと尋ねたりすること。

|      |    |
|------|----|
| 受験番号 | 氏名 |
|      |    |

|     |
|-----|
| 合計点 |
|     |